

## ●胃がん（内視鏡）検診

### 胃内視鏡検査のインフォームド・コンセント

- ① 胃内視鏡検査の内容
  - ・実施方法：胃がんを発見するために内視鏡を口または鼻から挿入し胃内を観察する検査です。
  - ・検査精度：感度・特異度が高い検査で胃がんを早期に発見できます。
  - ・検査による利益：胃がんの早期発見、早期治療による胃がん死亡率減少効果が認められています。
  - ・検査による不利益：出血や穿孔などの偶発症（生検によるものも含む）、偽陰性、偽陽性、過剰診断、過剰治療などとなることがあります。
- ② 胃内視鏡検査で病変を認めた場合、必要に応じて検査と同時に生検（精密検査）を実施する場合があります。
- ③ 胃内視鏡検査と同時に生検（精密検査）を実施した場合、生検にかかる費用は保険診療となるため、別途個人負担が発生します。
- ④ 胃内視鏡検査実施当日には、胃がんの疑いがないと判断された場合でも、別の読影医師によるダブルチェックにより、後日再度の胃内視鏡検査（精密検査）が必要と通知される場合があるため、その場合は必ず受診してください。
- ⑤ 市の検診では偶発症のリスクを避けるため鎮痛薬・鎮静薬を使用せずに検診を実施します。

### 胃内視鏡検診の対象・除外・禁忌条件

- ①胃内視鏡検診対象者の条件
  - ・40歳以上でかつ、過去1年間に胃内視鏡検診未受診の方
- ②胃内視鏡検診の除外条件
  - ・胃内視鏡検査のインフォームド・コンセントや同意書の取得ができない方
  - ・妊娠中の方
  - ・疾患の種類にかかわらず入院中の方
  - ・活動性潰瘍などの胃疾患で治療中または内視鏡による経過観察中の方
- ③胃内視鏡検診の禁忌条件
  - ・咽頭・鼻腔などに重篤な疾患があり、内視鏡の挿入ができない方
  - ・呼吸不全のある方
  - ・急性心筋梗塞や重篤な不整脈などの心疾患のある方
  - ・明らかな出血傾向またはその疑いのある方

## ●胃がん（レントゲン）検診

### 胃がん（レントゲン）検診の禁忌要件

#### ◆胃レントゲン検診の禁忌要件に該当する方は受診できません

- 1 消化管の閉塞・穿孔またはその疑いがある
- 2 消化管出血（吐血・血便）や強い腹部症状（腹痛など）がある
- 3 過去の検診でアレルギー症状（蕁麻疹、息苦しさ、発疹など）が出たことがある
- 4 呼吸不全がある  
（片側の肺切除術後、慢性閉塞性肺疾患（COPD）などで常時酸素吸入）
- 5 腎不全にて現在透析中もしくは心不全で水分制限を受けている
- 6 急性心不全や重篤な不整脈などの心疾患がある
- 7 全身状態が悪く、検査に耐えられないと判断される
- 8 妊娠中、または妊娠の可能性がある

### 胃がん（レントゲン）検診の除外要件

#### ◆胃レントゲン検診の除外要件に該当する場合、医師の判断で受診可能となる場合もあるので、要件にあてはまる場合は受診時に医師に申し出てください

- ・腸閉塞や腸捻転、大腸憩室炎として治療を受けたことがある
- ・食道・胃の外科的手術もしくは内視鏡治療を受けて1年以内（目安）である
- ・医療機関で定期的に胃内視鏡検査を受けている、もしくは受ける予定がある
- ・大腸・小腸の外科的手術を受けて1年以内（目安）である  
（ただしポリープ切除術などの内視鏡治療の場合は術後3ヶ月以降（目安）であれば可としてもよい）
- ・炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）で治療中である
- ・肝臓・膵臓・胆嚢・婦人科などの手術を受けて6ヶ月以内（目安）である
- ・検査前72時間以内に排便が全くない
- ・過去の検診で検査が中止になるようなバリウム誤嚥を起こしたことがある
- ・寝返りや立つときに日常的に介助が必要である
- ・水頭症で脳室-腹腔シャント（V-Pシャント）が施行されている
- ・ペースメーカーや植込み型除細動器（ICD）を装着している
- ・撮影機器の体重制限を超えている

※参考：日本消化器がん検診学会「胃X線検査マニュアル2025」

#### ◆検査後、次の場合は必ず医療機関を受診してください◆

##### ◎バリウムや緩下剤服用後に過敏症（アレルギー症状）が発現した場合

- ①強い吐気、腹痛
- ②じんましん、発赤、唇の腫れ、喉がつまる、息苦しい
- ③気分不良、冷汗、顔面が青白くなる

##### ◎検査翌日夕方までにバリウム便が排出されないまま放置した場合

バリウム便が排出されないまま放置すると、腸が詰まる、腸に穴が開く恐れがあります。

※その他の注意事項については、医療機関によって異なりますので、直接お問い合わせください。